藝州

嚴島圖會

一

安藝の國伊都岐嶋
姫大神ハ人の世と成て
此嶋へ天降給ひて上
ハ天津日嗣我より下さく
國の内せんこそ悦しき
もと乗のたゝあまき襟ニ

我等連句風時乃志さ
云は君子の為れつる志ん
秋沈みかゝ志なるは
て留くさ比喩にたしれ
極ゝやと留哉なるめ乃て姫
も三栗乃中登川まし

皇居和して玉櫛笥
二つ流れて君は津の人
國民き延けく居ゝ
へ常務堅務よ守り
法ちいえ務常極用む
多くちを西人あ姉歩

其元洞門よりて石上寺
彰ある鶴之ちかきをもよれる
に此世より猿ちかき鴨
乃羽子とちきに深くも人に及
河つめて馬ちかけ久
備んとて若千書きし

あはし麻呂は讃書
きんなしとちかねのにいち
元より治兼の若きの
御寺河りし時法の律
於屋王御門の大まうち
きこえの道の池ちとかき残

さまでしるめしもあまれ
市南雅好しいなかゝるて
てこゝの実なる一言を
らへて此書の正本に
清く永く是非代にと
に傳へんことをこひねがふ

流つん

天保乙未孟春

久我前内大臣源通明公

慎思齋主人書

嚴島圖會序

こゝのみそぢ六十あまり餘くにのうちに。花の都も
しらぬ山。月のさやけき海。水くさの清き原野。
きこゆる餘さへやつかれ。神のみいつのしるき
社。佛のちかひのあふとき寺。いくはくかある哉。
こ紙を世のつたへりゆかし筆くるよし。目のこぬところ。
足のいたらぬさかひ。かたのくすありぬ難し。いかな
いる筆や。わかましけしきてこそ。柱ともふるさも出来かちに
ぬる。みのわたをやうら人この為とぞ。今ハむかし
天明寛政のころほ。玉敷の都餘名所より始
あづまちの字ゞ枕なと紙。ひろく來筆。圖にある
ものしくにつる。絵あまたあとし巻をつくり世にある
より。大和河内き餘くにちりまたなど。つたへいでし
ものからめ。草の枕餘つゆ掛ふいたづらもなくなり

まれなるをのみ記せり。もらせるを補ひて。撰しつらね
けるは。いつのわざならず。かく篇どもまじへて。板になる
事なり。なかにも。このいつくしまは。しら波の八重を
る沖に。天さかりせる人たちて。大にあるる眛う流
れし人事跡も記しては更に毎いちず。花の枝も
ろ記。月のこよなし記。水辺の清き魚ら寄るのさや記。
こなとりよろひて。名せる記鳥もしあれバきこつせ

撰たらん人せ稀らいまちでまれし人 枝もさざなみ
き。されど。都よりも。あづまよりも。千里を撰せざて
しをちみ稀なり。わせしあれいせる事。人のあるまし
おかりなて。出せちあへぬぞ板わにあらわをこ眛
書。世に行はきなぞ。されば人々の年々。いつしし記
せまものなかるまじら 今日の二ぬ孫を記
なる事。今のいせらぬさこのひとつくさはなく。篇含を

於きてまたなく尊くありがたき。

天保七とせといふとし秋霜月

田中芳樹

伊都岐島図會序

百たら須いつまちま根に。ちづまりい蔵ほかる。三ちゝらに太神いしき。いちまく悲穴にかしまま天津神祖の御子達まし第。大御名の石上古りし代々の國籍りの書。いちちゝ疎く御德の久方の天の照日と彌さこのえにさかえ給して和かさ、天下にまで。玉匣二心なき名所になんある。かゝるめでたき。大宮所なり

きゆる故。うつたへ給ひの世にいたるまで。それ詳(ツバラ)に
志るせし書(フミ)。今はなきに。いかなれや口をしき。
おもひつるまゝに。おのれ清その國内(クヌチ)まで御徳(ミイツクシミ)を
かゝぶりし。御恩(ミメグミ)にこたへまつらんとて。遠(トホ)つ國人(クニヒト)は。
此大神に祈ぎごとあるもの世のならひに。かく
はらひて。えまうでぬ。それらがおもひやりにも
あるめ祈ぎ。此頃年比おもひおこして。此こゝろ
はだかるにあらしつる書(フミ)。世にあらせたきや。此

古今(イニシヘイマ)の書(フミ)にかうがへ。またし宮人(ミヤヒト)にとひたゞして。
先(マヅ)むねと大神の縁故(ユヱヨシ)より下は春秋(ハルアキ)の
御祭祀(オンマツリ)の根元(コトノモト)。からたる島内(シマチ)にありとあらゆる
ことまでも。すべて漏あらさず。巻(マキ)とをはいでゝ。
藻塩草(キシホクサ)やこのきあつめぬれど。なほか拙
もらせる世おゝかるめもおぼつかなくて。田中芳樹の
うしにかりはかるに。菅(スガ)の根(ネ)のねもころに
正(タヾ)して。まへをつらねつるを。藻屑(モクヅ)の中に玉

えつる心地ぞすなるよ。いでや此書をよめらのち。千里の外。四方の境まで。やりて。人々のよみみて。當社大神の大神徳を伝ゆる知しるさば。猶つがり防がきん縁たしなも。なりなんかし。

天保八とせといふ年十月　岡田清

凡例

嚴島は叢爾なる小島なりといへども本社の壯麗より始め名區佳境の於ゐ於山水風光の優なる他に比類なかるべき處をさしあることとなし故に今この書を編して凡島の内に發ることは鎖細も漏さず真景を寫して圖を設け實録を考へて事を記し看官をして眼前に瞭然ならしむ

草創より以来千有餘年の烏兎を經て時世の盛衰に志まざひ或は祝融の災に荒蕪し或は兵乱の害に移変せるもの多し然れどもさ次がに海中に屹立として陸地を隔たり居れば移のづから災害も遁れて沿革を知らざるものもまたなきにあらざれ圖を按して翫ぶべし

圖中間々人物の大圖を出せるが中には怪談奇話な紀

よしもあらん称どもみな古書ニ徴し来れバ妄なりといふべからず次
坐まし大經堂の櫟樟の故事の如きハ疑しきに似たれども
里老の口碑既ニ久しかれバ強ちニ捨べき故ニ載せて兒
童の欠伸を慰む
島外といへども地方前速田社大頭社官幣社誓願寺
田所氏などのごとき由緒あるかぎりハ悉く載たり
畫圖ハみな姓名印章を載てその人をあらハせり姓名
印章なきハ峻峯齋守嗣の筆のみなり
島内諸社の祭礼及禱祀の故事などをバ巻五ニ年中
行事と題して別ニ挙たり地方前以下島外の例祭ハ
一社〻〻の部下ニ記せり
又倉ニ蔵せる宝物ハ別ニ圖して五冊となし後篇
とせり
嚮ニ道芝記の作ありといへども畫圖少なきがゆゑニ実
地を履さる人ハ未だニ眼を悦バしむるニ至らず渉猟た
らざるがゆゑニ事跡を索る人の為ニ益あることなし
これによりて此度の挙ハ日本紀古事記等の古書も
更ニもいはず次野史稗官ニいたるまで勉めて據となる
ことハ本文をその侭ニ載せ聊かも私意の添削を加
へざるものなり
この書編集のはし末より故實の正誤をたゞし是非の添削
をくはへつるものハ本藩の頼惟柔加藤景纘周防の田中芳樹
なり

平相國清盛公書

一島椽孤洲之巖
嶭四面臨巨海之
渺茫

嚴島圖會巻之壹

目録

嚴島全圖表一
本居宣長
彩舟銜尾倚汀沙
隱映仙山五色霞
壖内潮田廊九曲
街頭鹿狎市千家
諸平威慾悲黄土
二帝宸遊想翠華
懐古何人同此意
四隣歌吹徹霄譁
茶山
長浦
新湊
大竹
玖波
大川
大江浦

表二
頂上石
求聞持堂
三鬼神
駒ヶ林
たきの宮
座主
大元社
室濱
立石

表三
題嚴島真景
為萩府頼文學
黄王表浸碧海浪金
榜御題射蒼穹。君
不見神人鋸断須弥
半。移而置之蓬莱東。
變幻萬狀揺未定。翩若
彩雲泛春空中。棲霊妃
市杵姫。紫貝之闕水晶宮。
君臣遭遇其所掌。香花奔顛
傾萬衆。余亦衆夢掌一到。珊瑚宝
鞭策白龍。僊鹿神鵶相後先。延余飛
度百尺虹。響屧廊驚迷初覺。百八珠燈
波底紅。寅夜始達瑶階下。仰歎大闇問
侫々。凶逆不臣平相國。義弘元就底蟻
蠓。不知神明何所眷。福祐擁護如許隆。
余有神策萬餘言。一言而可以興邦。東説
西説舌已爛。君相不省褎如聾。衰朽寒
餓非所顧。報國思効涓埃忠。聰明正直
如不昧。回首一為照丹衷。銀纏長刀兮
安在。何惜暫時借禿翁。哀歎千聲寂
不荅。悦然骨慄朦朧中。頼家真畾誰處
得。一々與夢所見同。對之猶疑魂未返。如聞
空楽梟暁風
柴邦彦
千畳敷
小浦
有の浦

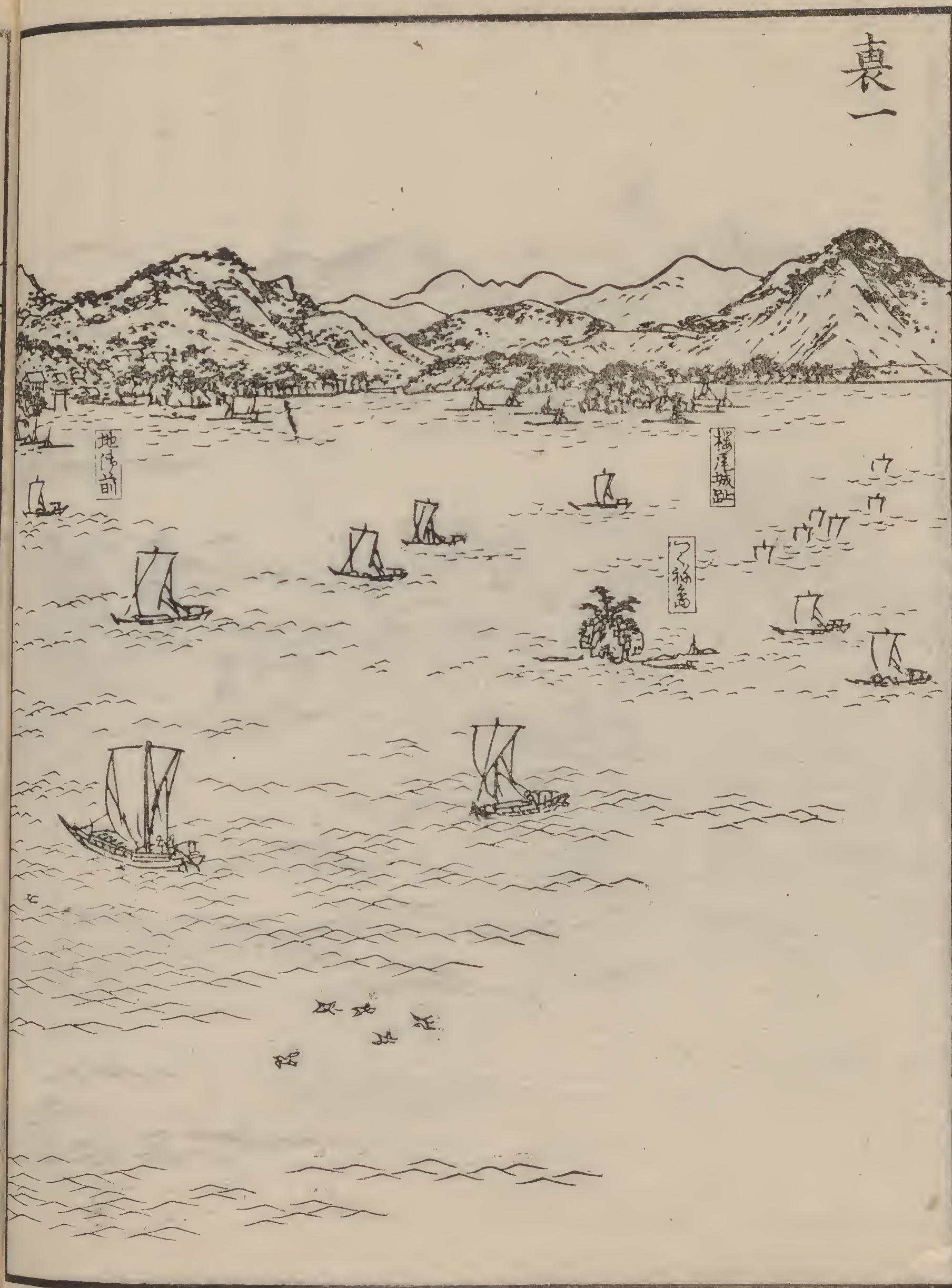
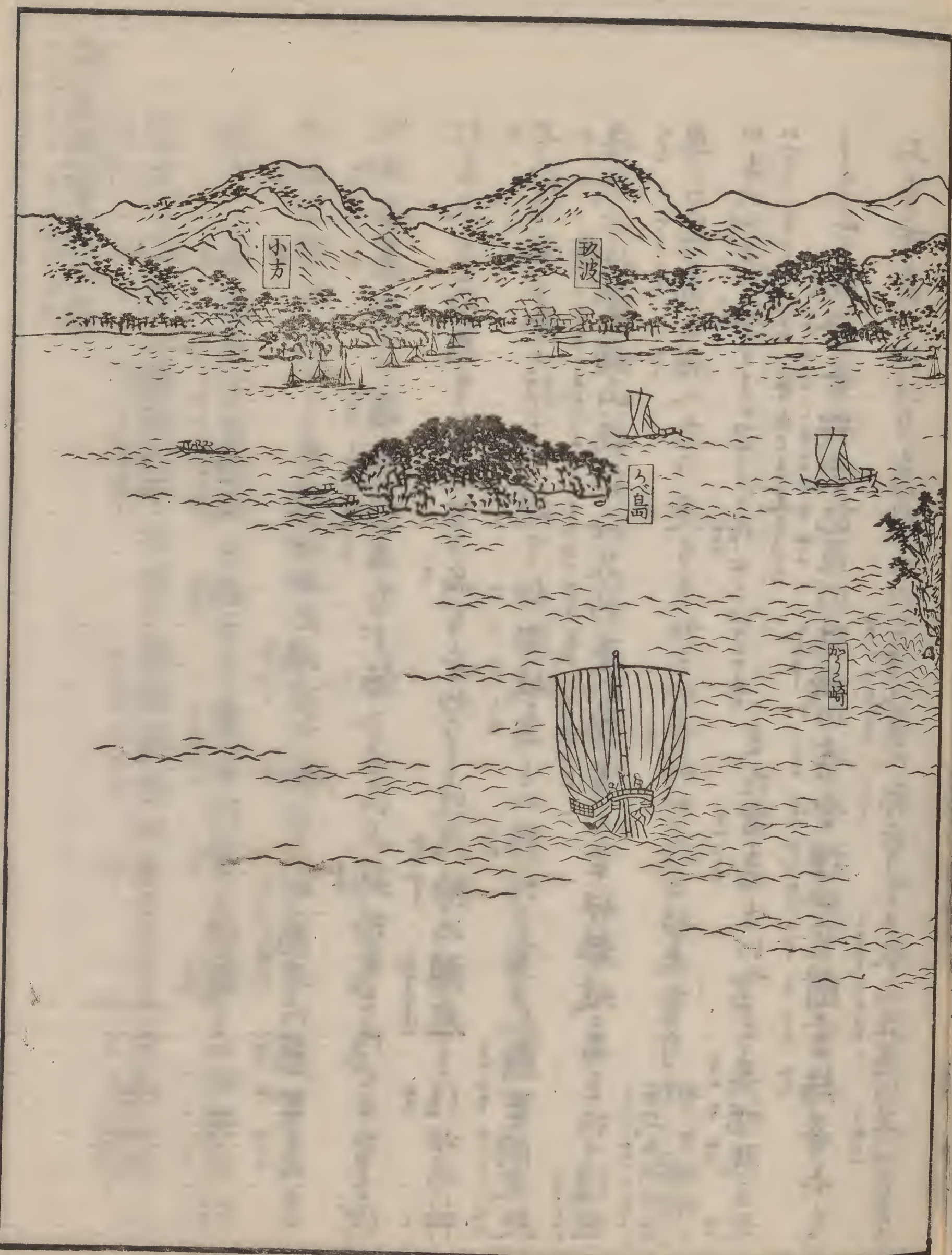
表四
神山縹渺小蓬莱
七浦風烟與海開
今古精禋無廃馳
閟宮時進紫霞杯
寺田臨川
江田島
小なさび
大なさび
屏風浦
長浜蛭子
仁島
つねしま
聖崎

櫻尾城趾
うばかふところ

裏二
杦の浦
三十一丁
包ヶ浦
包岩社
七浦の外之
杦の浦より
九丁
弥山
上阪谷
包ヶ浦より
十四丁

登彌山
雖愛雲光薄
尚知嵐氣遒
穿林觀瀑水
度嶺遇麏麚
松偃堪為桟
巖懸自作家
樵童華表外
拍手喚神鴉
賴春水
裏三
求聞持堂
三鬼神
三好ノ尾
かれひ石
腰細浦社
いよ松
さぬき浦

小方
玖波
大野
菓子盆岩
白濱社

嚴島圖會巻之壹

嚴島ハ安藝の國西海中にあり府城廣島を去ること五里佐伯郡に属せり島周廻七里西北を面とし東南を背とし遠くハ伊豫周防の地を望みちかくハ佐伯郡の地方に對せり旧島号ハ恩賀島また御香島あるハ霧島我島など称へりといふ説あれどもさだかならず次にもふまこの島もとハさせる名もなかりしに此神の鎮座し後其の神号の市杵とかよはして頓て伊都岐島とハ號たるならん類聚國史延喜式三代實録山槐記拾芥抄等の諸書みな伊都岐島とあり後世専ら嚴島と称へたり是もまたその音のかよへるゆゑなり　また宮島といへるも其唱既に久（宗祇名所方角抄に嚴島明神之の島此山なみ磯のさまいつくしと作りけるよりいつくしまと号せりと云くと見えたり）しくして高倉帝御幸記及び殊域の書登壇必究圖書編等にもみな宮島とかけり島のうちに七浦八景の称ありて日本三名區の其一なり

按ふに上件にいへる恩賀島また御香島我島霧島などの説更に正史に見る処なし但道芝記に二首の歌を引て入海の八十浦らけて十島なる中に香らの紀島ハ七浦恩賀しま花をかこゑを井のづらよと妃がし波をこゝりなりと深云こ第一首を小野篁の歌とし二を在原業平と次こ此二歌によりてれんがの島といふよしを記せりはまど香深き島となる故以て御香の島とよび恩賀の字をれがへなし紀と訓ずるなど其義知がたし　まこと我島の説ハ[illegible]つこれ抄き所こ挂う始こまどこハまぎの島[illegible]此義に據ざるなり然るにこの歌安藝國名所として[illegible]我島海島の二島ハ佐伯郡能美島海上にありといふ是[illegible]ならさるべしはてハ神詠と称んと中くに杜撰といふべし霧島[illegible]何の證となし

懐中抄

あこなからん人にハ見せじいつくしま波のぬれ衣きせん拙このは

剱玉御誓（けんぎよくおんうけひ）

久かたのあまた井乃水のおもかげたゝ岩とつる姫のなかゝ

ましらなめ

田中 芳樹

二神安河（やすかはのかは）のながれを隔（へだ）てむかひ立（たち）給ふたまふてと本文（ほんもん）のごとし然（しか）るにその畫（ゑ）をかく沢してたゞ雲（くも）城のかゝるへこの御誓（うけひ）天上（あめ）にてのことなるよしを児童（じどう）に輙（たやす）く知（しら）しめんとてなり

画院生徒左京藤可為筆

画院生徒

本社 安藝國第一宮
嚴島大明神

○延喜神名式曰安藝國佐伯郡伊都岐島神社名神大

○諸社根源抄曰安藝國佐伯郡伊都岐島社名神大市杵島姫田心姫湍津姫以上三座

○大日本一宮記曰安藝國佐伯郡伊都岐島神社

○正殿三座

市杵島姫命　田心姫命　湍津姫命

○合殿三座

國常立尊　天照皇太神　素盞嗚命

○客神社五座

正哉吾勝々速日天忍穂耳命　天穂日命

天津彦根命　活津彦根命　熊野櫲樟日命

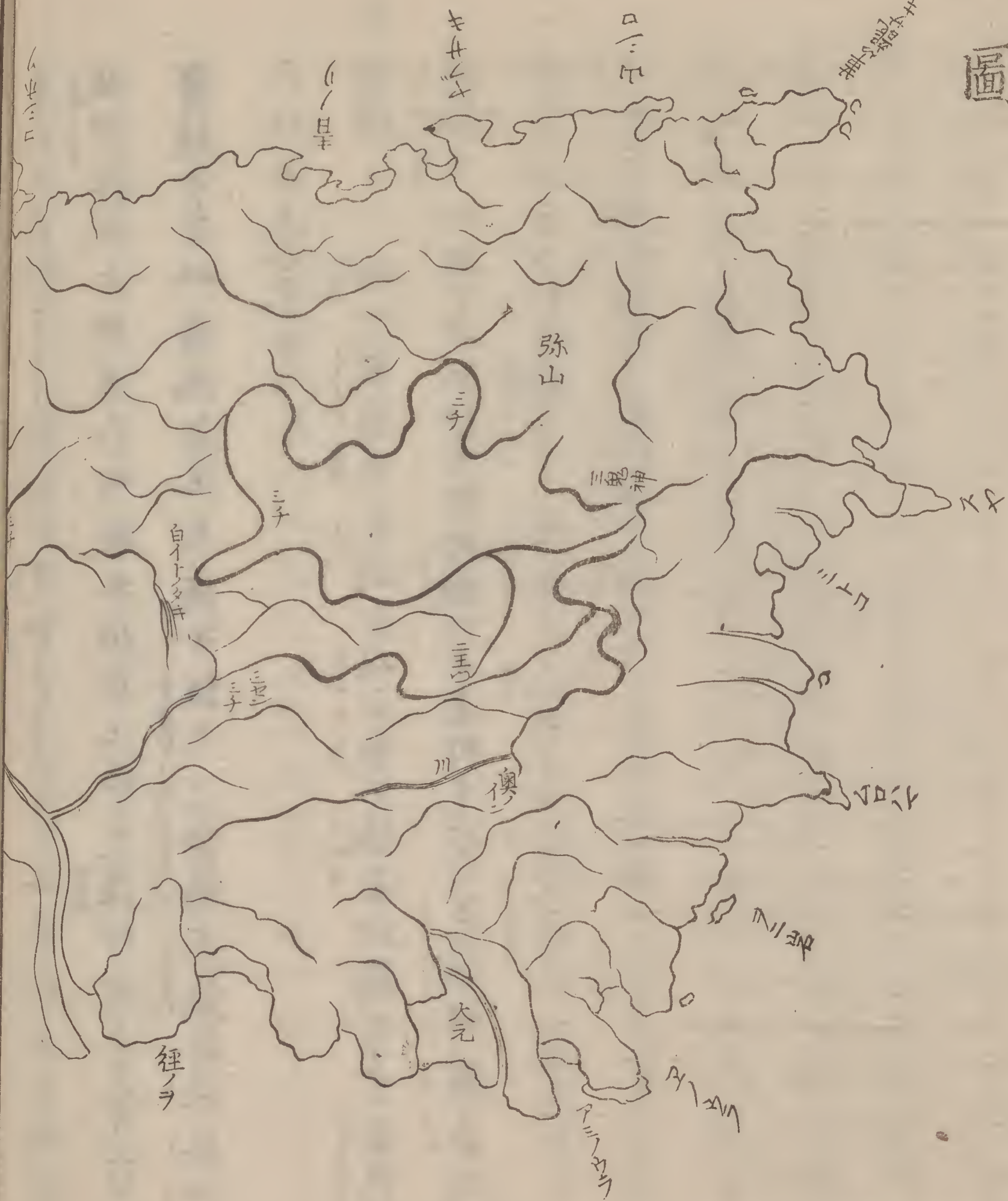
○古事記曰於是洗左御目時所成神名天照大御神次洗右御目時所成神名月讀命次洗御鼻時所成神名建速須佐之男命此時伊邪那伎命大歡喜詔吾者生々而於生終得三貴子即其御頸珠之玉緒母由良邇取由良迦志而賜天照大御神而詔之汝命者所知高天原矣事依而賜也故其御頸珠名謂御倉板擧之神次詔月讀命汝命者所知夜之食國矣事依也次詔建速須佐之男命汝命者所知海原矣事依也故各隨依賜之命所知看之中速須佐之男命不知所命之國而八拳須至于心前啼伊佐知伎也其泣状者青山如枯山泣枯河海者悉泣乾是以惡神之音如狹蠅皆滿萬物之妖悉發故伊邪那伎大御神詔速須佐之男命何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流爾答白僕者欲罷妣國根之堅洲國故哭爾伊邪那伎大御神大忿怒詔然者汝不可住此國乃神夜良比爾夜

良比賜也 中畧 故於是速須佐之男命言然者請天照大御神將罷
乃衆上天時山川悉動國土皆震爾天照大御神聞驚而詔我那勢
命之上來由者必不善心欲奪我國耳即解御髮纏御美豆羅而乃
於左右御美豆羅亦於御鬘亦於左右御手各纏持八尺勾璁之五
百津之美須麻流之珠而曽毘良邇者負千入之靫附五百入之靫
亦所取佩伊都之竹鞆而弓腹振立而堅庭者向股蹈那豆美如沫
雪散而伊都之男建蹈建而待問何故上來爾速須佐之男命答白
僕者無邪心唯大御神之命以問賜僕之哭伊佐知流之事故白都
良久僕者徃妣國以哭爾大御神詔汝者不可在此國而神夜良比
夜良比賜故以為請將罷徃之狀衆上耳無異心爾天照大御神詔
然者汝心之清明何以知於是速須佐之男命答白各宇氣比而生
子故爾各中置天安河而宇氣布時天照大御神先乞度建速須佐
之男命所佩十津加劔打折三段而奴那登母々由良爾振滌天之眞
名井而佐賀美爾迦美而吹棄氣吹之狹霧所成神御名多紀理毘
賣命亦御名謂奥津島比賣命次市杵島比賣命亦御名謂狹依毘
賣命次多岐都比賣命速須佐之男命乞度天照大御神所纏左御
美豆良八尺勾璁之五百津之美須麻流珠而奴那登母由良爾
振滌天之眞名井而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神
御名正勝吾勝々速日天之忍穗耳命亦乞度所纏右御美豆良之
珠而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名天之菩卑
能命亦乞度所纏御鬘之珠而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹
霧所成神御名天津日子根命又乞度所纏左御手之珠而佐賀美
邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名活津日子根命亦乞度
所纏右御手之珠而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神

御名熊野久須毘命幷五柱

日本書紀に一書以曰神所生三女神者使降居葦原中國之宇佐島矣今在海北道中號曰道主貴此筑紫水沼君等祭神是也云云また舊事紀には三女神降居筑紫國宇佐島在海北道中とありこは筑紫の宇佐島に御鎮座のことを記せるなりけるを在海北道中といへるをもてこの島社をこれにあつるは謬なり

神階　三代實録曰貞觀元年己卯春正月二十七日奉授安藝國正五位下伊都岐島神從四位下同九年丁亥冬十月十三日戊寅勅授安藝國從四位下伊都岐島神從四位上云々のちつひに正一位まですゝみたまへりそも〳〵神に位階を奉らるゝことはもと尊卑をわかつためにあらず令義解に神田耕等に神位の高下をもて神領の多寡を定らるゝことゝ見えまた北畠准后の造殿儀式にも神の品位をもて封域を定むることありて正三位以上四至九町從四位以上四至八町從五位以上四至限四町と見えたり三代實録に又仁壽元年正月庚子詔天下諸神不論有位無位敘正六位上と見ゆ

○神領　按に聖德太子傳に推古帝の綸旨を載せる當社神領は當國中水田一千百八十町修理八千余町とあり是明神廟祭の時の寄附と見ゆれど外に證なし神庫に藏める古文書に仁平四年に院廳幷國司廳宣を以て當國高田郡三田一御を神領に定らるまた仁安元年の立券書には一宮御領志道原合一町六反二百四十歩とありまた嘉應三年の文書に公家方幷建春門院御祈禱料伊都岐島御領壬生庄田七十六町畠十一町とありまた安元々年春木市折二村御供田同二年高田郷七箇郷を附せられ治承己年に清盛より安麻庄を寄進ありて正

全圖
南
東
弥山
コルギ岩
本社
大元
二位ノス
アリノウラ
中小ウラ
ヤウカヒ
小ウラ
北
西

治元年また朔幣殿中御供田新御供田など定らる文暦年間周防前
司親實當國の守護となり神職から神領を支配をまうし東鑑に承
久二年二月十八日安藝國與赤地頭令寄進嚴島神領云々正應六年
蒙古来寇のとき降伏の祈禱ありて鎌倉より因幡國船岡御半分寄進
ありしのちに足利尊氏大内義隆よりもしばしば寄附ありまた房顯記に
は小方久波黒河大野山郷の二ヶを大内義隆より寄附のこと見えたり
り其後毛利家の時は五千石なりしが福島正則入封のとき諸寺諸
社の領園を削りし中にも當社領を大に減少せし理
伊都岐島の大御神と称じ奉るは掛巻も恐き市杵島姫命湍津姫
命田心姫命以上三女の神にましまして共に天照大御神の生ませると
ころなり伊邪那岐命伊邪那美命天下の君たるべきものをうまんとて
て生しまする御子が天照大御神と申し奉る次に月讀命次に素

須佐之男命と称じ奉れり於是天照大御神は高天原を所知めし月
讀命は青海原を所知めす故各依したまへるまにまに所知めすが中に須佐之
男命は其性勇悍くして青山を枯山となし人民を害ひたまひしかば
伊邪那岐命いたく忿怒して極めて遠き國に神逐にやらひたまふ
於是によりて須佐之男命根國に至りたまはんと為したまつ天照大御
神に其由を告て後にこそ罷りなめとて高天原に参上りたまひしかば海山
鳴動ありて天照大御神このを聞召して大に驚したまひ是ぞかならず須
佐之男命のあしき心より起れるなるべしとて御身に勇夫の猛き備を設
け嚴男建蹈建て待たまへるに須佐之男命これを見まして僕は然る異
心なし此度父命に逐はれしによりて告白て後まからんため参来つるを
こそ[illegible]天照大御神聞召しを然らば其清き心は何
としてかしらしたまはんと詔ひき於是須佐之男命のたまはく我阿

尊とゝ共に誓ひをたて御子生み侍らんとちぎりたまひて各天安河を隔て誓ひたまふ時に先天照大御神須佐之男命の佩したまへる十握の劔を乞度りうち折て三段になし天の真名井に振滌ぎ齚然にかみて吹棄る狭霧の中に生しませる御子田心姫命市杵島姫命湍津姫命にまして既にしてて須佐之男命天照大御神のとちたまへる八坂瓊乃五百箇御統の玉を乞ひとり天の真名井にふりすゝぎてさがみにかみて吹棄る息吹の中になりませる御子正哉吾勝々速日天忍穂耳命天穂日命天津日子根命活津彦根命熊野櫲樟日命以上五男の神にてましますしかるに當島に鎮座のこと正史に載せしこと如く總じて社家の傳ふる所は昔三神此地に天降まし此島に御在所を定むべきよし當郡の住人佐伯鞍職と云者に託言なし給へり鞍職かしこく此由官奏を經られば御寶殿を造立し神領許多を附たまひきこれ推古天皇端正五年癸丑十一月十二日なりといふ

按ずるに端正の年号帝紀に載せざる所にしておぼつかなし或は崇峻帝の朝端正の年号ありて五年にして終るそれより崇峻帝即位二年は端正元年に當れりといへり又曰端正五年は推古帝即位元年と次べきや蓋し聖徳太子傳暦を推古天皇即位元年十一月十二日明神はじめて現したまふよしを載せり此説據あるに似たりまた卜部兼右の遷宮記には端正三十二年甲申鎮坐したまへりといへり房顕記（當社天文のころの神官房顕の作なり）にも端正は年号にあらず天子即位をいふといへりされど大化前後正史に載せざる年号かまゝこれら書にみえ法興（推古四年也）の年号は伊豫國の湯碑に見え法興元世（推古二十九年法隆寺）釈迦仏光後銘に見えたりかくのごとく載のまゝに傳ふる金石にを見ゆれば古代年号ありしこともなほ強ふべきにあらず其後

烏兎五百余年を經て社頭の荒廢甚しかりしに平相國清盛たゞし當國の守護たりしと也不思議に夢中に告ありて社頭を再建したまへり其頃は人皇七十四代鳥羽天皇の御代しろしめしける時なり此清盛高野の大塔を修造せられけるに七十有余の老僧の眉に八字の霜を垂れ面に滄海の波を畳ませ杖の二股なる先に鐵の入たるをついて清盛に申されけるは此大塔の造營を遂らへちかく神明を爰にまさとひとの願あり抑安藝の嚴島と越前の氣比とは西海北陸境異なれど共に金剛胎藏両界として目出度處にて侍なり氣比社は繁昌せ

清盛靈夢の圖

と云ども厳島ハ荒廃せり汝須く早く修理を加へ崇敬を盡さば我身の栄華子孫の繁昌たるべしと申たまへりこはいかなる人にて座次らむと見て参れとて人して其跡を見せたまふに三町ばかり隔りて彼老僧ハ御堂の中に入るよと見えしハ一場の春夢にぞありける清盛奇特の思ひをなし下山の後院参して右の夢想を奏聞し任を延て當國に下り新に殿宇を改め作り百八間の廻廊を起し鳥居を建摂社末社に至るまで壮観旧にまさり修理功終りて清盛大宮に参籠せられるに天童忽然として現し来り我ハ是大明神の御使なり此劔を以て朝家の御固をなし置て銀の蛭巻したる小長刀を賜ると見て覚しに實に其頭邊に劔ありける但し悪行あらで子孫までもかなふまじきぞと御託宣ありける 盛衰記平家物語取意 かく栄しより一門の覚えいやましにたかくつひに清盛朝廷の外戚として太政大臣從一位に歴上り威を一世に振ひたまひし偏に當社の御をうひとなりかとはきけるはまことむべしを今世に示現即託乃利生新にしてかくぞ天子の行幸を初め奉り代々将軍家の崇敬おろかならずおよそ西討東征北伐南誅或ハ自ら蘋蘩の礼を取り或ハ代幣を以てかならずぞ先當社において軍陣の道途を祈らざるはなし就中文永正應の頃異賊来寇せしにもまた降伏の御祈ありて其故に社頭の結構ハ日を逐ひて美麗に四時の祭礼ハ歳々に厳かなり百八の神燈長に日月と光を争ひ参詣来輳の輩ハ雲霞とともに去来を絶ず殊にこの御神ハ海路の安全を守護たまふなれば澳漕ぐ船を奠を設て過き漁る泉郎をまづ初穂をさゝげたてまつる誠に海西の大社にして當國の一宮と仰ぐもまた宜なるかなや御社ハ島の北面に在りて山に背き海に向ひ廣作に宮居したまへる其の景たるや

日域に名たゝる勝地にして先哲既に龍都仙宮に比せるもまた其當を失なはずといふべし廻屈せる廊々輪奐たる宮殿潮水の上に浮んで恰も蜃楼の波に漂ふごとく弥山の嶺高く聳へ松嵐直に吹落て蒼翠の色瑞籬に映帯す獼猴子を負ひて市頭に戯ふれ麋鹿群を率ゐて沙上に卧す遥かに眺望を極むれば蒼波渺々として遠帆は動かずと詠ぜしもむべなり且この島は桜多くして百千鳥囀る春のころは峯々谷々社頭浦々に至るまではなにあらざる所なくたなびく雲散雪飛一招なるが如くして騒人墨客乃心を蕩かす中秋の月は弥山の上より出て銀色三千界をとながむるしまた雪の行したも殊更にしてたへ妙眺望はおよそ三景の冠たるべし

○西行撰集抄曰 何きおもらくしまの社はうしろは山深くしげりまへは海庇は野右は松原なり東の野に清きながれありこれを御手洗といふ御社三所おはしますまた次こし前の方に引退て南北へ三十三間東西は二十五間の廻廊侍る潮の満つと記は廻廊の板敷の下まで海になる汐のひく時は白沙五十町ばかりなり然はあれども汐のはしたる時まるればふねにて廻廊の中までまゐるなり氣高くいみじく紀するたとへもなく侍るなる御手やらん御簾のうへに御正躰の鏡をうけせで御簾の下にうけまゐらせたまなりこれ御神は女躰の神にておはしまさばかくはならはせ給ふやらんおもひはかるには御社は山上にあぞり廻廊は平地にありて東西南の三方晴やかにてこれを汐み侍るところは鹿を狩ざれば御山はまたて小鹿なき草に露おちて虫のこゑはうりに侍りしなるんなる人をこれ御社にてはんのまもなる

本社（ほんしゃ） 客人社（まらうどしゃ）

前権中納言持卿

うな原や
まちも
たくひハ
なみのうへに
とや居
しまされ
いつく
しまかな

本藩加藤氏所藏宮摹貝の圖

貝大さ蛤のことしひさりの如き白紀ろひまて表ふ鳥居の紋あり文化乙丑のとし大鳥居の洲ふて拾ひ得しものと稱

所からちなみのしるしゆふ
ふけるくもうしろ紀
鈴のこゑやうつし貝

山田貴之

法橋有景寫

とこそ申傳へて侍る　按ふに撰集抄にいふところよくて此地の景勝にかなへり但し其頃ハ本社の左右に松林原野なりしところ今ハ市街となり多く堂社を置たりいま御霊川の斎になかき松原なるハ後に築るものなり　御霊川ハ抄に東の野に流き流なりといへるこれなるべし

○大宮寶殿　明神鎮座の正殿をいふ桁十二間梁五間五尺余　○幣殿　正殿の前にあり桁三間二尺梁二間五尺　○三棟拝殿　幣殿の前にあり桁十五間一尺梁六間半　○袚殿　同殿の前にあり俗これを組入と称す　桁八間一尺余梁五間半

○高舞臺　伶人舞樂を奏する處なり袚殿の前にありて神殿にむかふ左右に唐銅の獅子石燈籠あり　○平舞臺　高舞臺を挟みて左右にありて臺下に石柱三百十二本高五尺五寸圓八寸ことく赤間関の石をもちふ　○楽房二宇　左右に分ちて平舞臺に連なれり

○門客神社二宇　楽屋とならびて左右に分れり　俗に沖恵美須と称す
祭神　豊磐間戸命　櫛磐間戸命

○廊嘴　門客神社二宇の間より長く延出して西北にむかふ正殿よりこゝまで凡三十六間あり　當社宮殿の中央に神殿をおき長廊廻廊して蟠龍の如くして此處長くさし出たり依て俗に是を舌先とよぶ　唐銅の燈籠一基あり

○大黒堂　大宮の左にあり
祭神　大國主命

○天満宮　同殿の傍にあり毎月連歌の會あり故に連歌堂といふ古人の名句おほし

○客神社寶殿　大宮の右三十間にあり西南にむかふ桁七間余梁四間五尺　○幣殿　客神社の前にあり桁二間四尺梁二間一尺　○三棟拝殿　同所にあり桁十二間余梁四間四尺　○袚殿　おなじく拝殿の前にあり　桁五間梁四間四尺

○廻廊　およそ百八間ありて間毎に燈籠一箇を釣るすべて廊の板敷釘を用ひさる故に行歩に随て鳴る

○圓橋　大宮の左にあり御池に架せり幅二間長十四間俗に反橋と呼ふ

○平橋　大宮と客神社の間にあり

○瑞籬　大宮客神両宮の外垣なり長およそ百間ありこれうちを玉の御池といふ

○御供所　本社の東にあり

○湯立殿　客神社の北にあり

○能舞臺　大宮の西南にあり斜に神殿に對す三月十六日より三日のあひだ法楽神能あり

○鐘樓　本社の右にあり鐘ハ大内義隆の寄附なり　銘別にしるす

○寶藏　大宮の南にあり庫中に納むる処の宝物ハ別に梓にちりばめて後篇とせり

○文庫　大宮の北にあり二十一史十三經をはじめとして和漢の書籍数百部を納む中央に聖像をおさむ額ハ文徴明の筆蹟を集字にして名山藏の三字を刻す　また聯および東壁図

大鳥居額(おほとりゐのがく)表(おもて)

同 裏(うら)

大内義隆花押

書府西園翰墨林の句あり
北島雪山が筆なり

○大鳥居 古先を去ること七十間余海上にたつ柱高四丈四尺三寸圍一丈五尺副柱高二丈八尺圍り一丈一尺五寸棟長六丈四尺四寸梁五丈九尺六寸左右柱相去ること五間余結構高大にして甚壮観なり

これよりさきこの鳥居改作ること数度まづ平家物語に清盛鳥居まで改作るよしありその後寛元仁治の間本社修造のとき改め造りまた弘安九年應永四年天文十六年元文四年享和元年を以て次々数度の經營みな北条足利大内毛利等或ハ本藩の修寄附なり按ずるに草庵集萩のうら社頭に藝州いつくしまの鳥居の柱ハ五抱なり一本ハ萩乃木にて作るときゝ由其の頃なりけん島にてぞその傳なし

○同額 竪八尺三寸横四尺二寸 西にむかひて見るべし

今の額ハ 後奈良天皇の宸筆にして大内義隆の奏請して奉納し所なり傳へいふ昔の額表ハ小野道風裏ハ空海の筆なりと

按ずるに玉海に 高倉天皇の承安五年七月十三日右衛門督宗盛以信基朝臣示送頼輔朝臣云伊津岐島額可申請書有恐本額前大僧正被書之今亦立鳥居仍可打額申他人有憚定無可然之様相謀可令申とありまた安元三年六月十八日今日召尹明送伊都岐島額於右将軍之許来月入道相國相共可参詣彼社仍件額字都津両字未決仍尋官文殿式正之之處為都字之由隆職已注申仍用件字とあるによればこれ風乃書なりつるハ承安のころより前つかたの事となるべし

○繪馬 上諸侯より下庶民に至るまで萬國より献じ奉る所にして其數多なる凡天下に冠たりまづ本社の組入れうちより初て客神の宮三棟拝殿東西廻廊これ間透間をなくかけならべ其大なるハ凡竪九尺横一丈二三尺に至るもこれありてみな名画の巧を尽せり

繪馬を観る圖

就中古法眼元信の牛若常信の七福神狩野左近が馬尚信の羅城門土佐某が三十六哥仙うたハ山崎宗鑑の筆なりおなじく哥仙繪ハ土佐家書ハ照高院道澄親王是等世のよく知るところなりその余石川左近をはじめ近世諸名流の墨跡もとより枚挙するにいとまあらず

○社頭修理　推古天皇の御代佐伯鞍職官奏を經て始て宮殿を創建せしよし傳ふこれ当社造営の始なるべし其後清盛摂社末社廻廊鳥居に至まで悉く修造せしこと平家物語にみえたり但し其間修造のことなきにあらねど典故の徴すべきなければ考るところなしそれより仁安元年祠官佐伯景弘が修理奏状に神殿并に舎屋私力を以て改作るよし見えたり建永二年に殿宇回禄せしかば官使を下し地を撿し造営を命ぜらる建保三年になりて貞應年中まで回禄

まで四ヶ年の後安貞元年に平宰相經隆当國の司として下向造営ありけり天福年中祠官親実大工少工鍛冶檜皮師瓦師などの諸工を鎌倉より召よせ造営ありしを勤しむつひに嘉禎元年勅して当國を社家に附せられ八年が間の貢をもて両宮を修造し奉る仁治二年大半調ひしがいまだ全備せざるを以て寛元々年廳宣を下しまた井原の地を神領に寄せられ造営の料を助くべき旨命ぜらる其後ほど経て弘治元年毛利氏陶全薑と合戦の刻神殿までに焼べかりしを吉川元春の力により災を免れしこと陰徳太平記に見えたりされど神前を清めんがため同二年毛利家より廻廊板を改作らる永禄年中和智豊郷同湯谷久豊兄弟を神殿において誅せらる此穢によりて毛利家より改造せらる元亀三年に成就せしかば神祇官吉田兼右下向ありて遷宮の式いと厳重

なり。

○摂社末社

大元神社　瀧宮明神　白山神社
山王社　道祖神社二所　湯殿山神社
今伊勢神社　恵美須社四所　荒神社二宇
杉浦神社　鷹巣浦神社　腰細浦神社
青海苔浦神社　山白濱神社　洲屋浦神社
御床浦神社　包浦神社　養父崎神社
牛王社四所　熊野神社以上島内所々にあり
地御前社　速田大明神社　大頭大明神社
天王社　大瀧大明神　惣社
角振社　官幣社以上島外所々にあり

○社家供僧内侍社役人職名

棚守職一員　上卿職二員　祝師一員
大行事一員　検校職一員　横竹職一員
修理行事一員　小行事一員　地御前棚守職一員
客神社棚守職一員　楽方十五員　内侍職三十一員
神楽男六員　仕人七員　神馬別當職一員
御湯立祝者十二員　大工職一員　小工職一員
鋳物師　瓦師
國府上卿屬官九員

○

座主　修理別當職　社僧十五坊

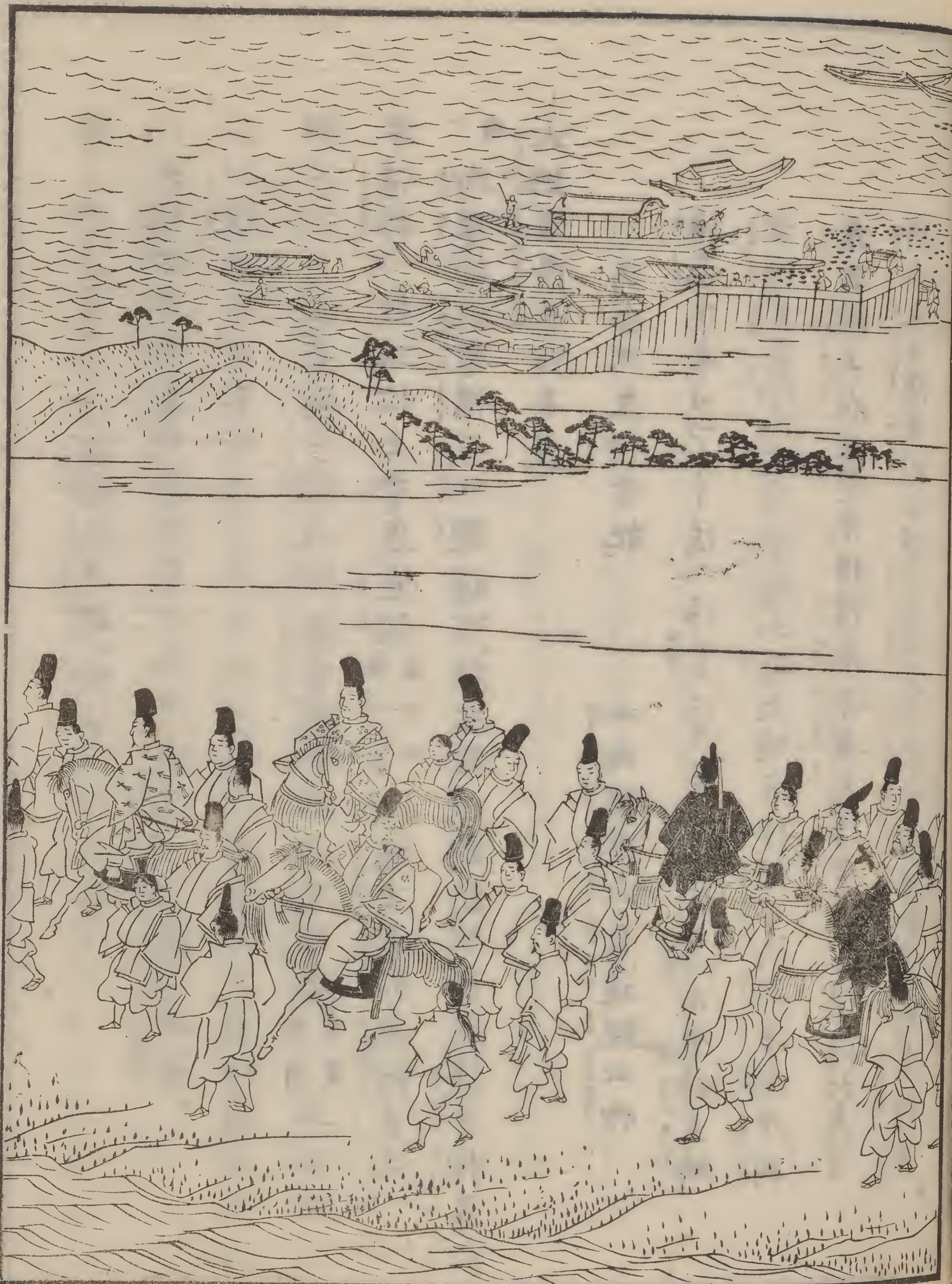
○百練抄曰承安四年三月十六日法皇後白河建春門院臨幸安藝

嚴島四月九日還幸云々　按ずるに此時右大弁藤原俊經建春門院の御願文を書しこと盛衰記に見えたり

○梁塵秘抄口傳集曰あきのはじめつかた建春門院にあひぐしてまゐることありきやよひの十六日京をいでゝおなじ月廿六日まゐりつきぬ宝殿のさま廻廊ながくつゞきたるましおほしてわたれるうみ下まで水たゞへはるかに海のおもてに浪しろくたちてながれたるむかへは山をみまはす木々みなあをくみどりなりやまにたく見るじんぜんの石水際にしろくしてそばだてたり白き浪時々うちかくる見ゆるさまことかぎりなしねぎひしより毎朝もしく見ゆそぶりの内侍ふたりくる釈迦なりかゝる装束をし髪をあげて舞をせり五常楽狗鉾をまふきかくのごときの袖ふりたるもかくやありけんとおぼえて見てたり沢上達部殿上人楽人太政入道そのともん人いまだ座をたゝぬほどにまはしきみことて年よりる女房具して人きたまり我にむかひて居替はる座うまればまうしてそれはなふべし後世のこと申したまへかしなにはなせ今様をきかばやとおもひあまりをはずしてしばしも昼なりし次第を座うもなくて何にかたびたびいへど資賢をよびてこれらをへといふ畏りて居たりなどきかむといへばすがたなくていそぎ次第の声聞いはば我のよろこび身より母はまゐるら節にたちが後世のたゝとけがとたしかに聞けるかぶなれど

とかくしてこれつけまといへど資賢あらでつくるをなくて二反をうちまぬる後ば後世のこと他念なくまゐりけるをおもひ出でたりしかば信をそ案てなみだおさへがたかりき太政入道これ清神は後世をたのみおもひよろこばせたまふよしまうしけしかば陪ぬるほど現世のことなどとまうさ

高倉院御幸の圖

其二

ぬさへにはありしかば後世迄もいひいでたりしなり

○百練抄曰治承四年三月十九日新院高倉厳島御幸

○山槐記曰治承四年三月十九日新院令泰安芸國伊都岐島給四月九日還幸御幸間被行勧賞従四位上平資盛 福原家賞 正五位下平清邦 同 従五位上菅原在經 國司賞安居寺也 神主景弘 祝師支之 巳上二人 一御導師前権僧正公顕追可請在經被聴新院昇殿後日相尋師一階大納言隆季被召還

高倉天皇御幸記　土御門内大臣通親公作

治承四年いつくしまへ御幸ありしとき公卿には帥大納言隆季藤大納言實國五條大納言邦綱土御門宰相中将通親殿上人には中将隆房弁兼光御幸にぞつかうまつりけり行ふ木工頭家則てものかは前右大将宗盛以亮重衡参議の中将時實などにて女房は五人ぞありけりかゝる人々ぞまゐる人もおなじ次よりおなじ舟どもにぞのれ船よそひたゞしくみつの浜につきたまふ 中畧 弥生廿あまり申の時にあさみどりうましほよりもとゆにつくこと侍てかくなうしおほくて髪をあらひ身を清む宮島ちかくなりまゐりとはよきんぼやまぞ廿六日空のけしきうらゝかにて神のこゝろうけよろこび給ふにやと見えてさまゞの有様にてあるし日はしいつるおとに出させたまふ午の時に宮島につかせたまふ神宝ひかゆはまゐらるゝ様てまゐり設たるよし申に陰陽師の船暫らくまうく空はれし比とき後のけりさ夜眼とんもおぼえ次大唐の湖心寺をかくやと見え神山の洞などにいりたまふそち次宮島の有乃浦に神宝とゝのへたてゝ御前に社司狩衣など着たるとも神宝をもちてまゐる大幣にそひ清め中てまゐりける

時実の中納言つぎてまゐられ潮ひくかぎりにて御所へ御舟
よせ給ぞはしめ給ひてぞおりさせたまふ公卿御供に侍
らひて宮し湯の南のかた三間に面れ御所につくりて障子れ
繪どもと海のかたをかきたるうみのうへなぎたるまで廊をつくり
づけてしおみさぞ御船をはしよせん支度をぞしたる御か
湯殿などありて絹の御浄衣めしていでさせ給ふ御所のひ
んがしれ庭に白木の机をたててちごも御しまして白妙の幣
御よせさつるれひがしに唐櫃の蓋をあけて金の幣をおく其
西に菓子御しきて陰陽師の座と次神馬一疋たつ左衛門尉
信定時棟これをひく北面などといふさはじめおりまじれば御供
まいる上達部の侍をぞ居させたる隆房の中将御前にはべる婦宮
内少輔棟範役送をつとむ御裾をて蔵人は召使御沓御持

て先にまゐる廻廊のまへの浜をめぐりてまゐる廊を通りて
まゐらせたまふくるゐれ御時は一二町をだに筵道をしきま
ゐらせしにめしならはぬ御沓もいとどおぼつかなげにて上達部
殿上人御供に侍ぞ客神の宮にまづまゐり幣たまふ金銀の幣
みさはらげ白たへの幣神官とりて宝前に備へならべたり拝殿
のうちあれど高麗の半帖一畳御拝の座と次金銀の幣八兼
光の弁つたへとりて隆季の大納言つたへ取てまゐらせ御拝終
りて帰らせたまふ祝師たまはる御琴一御琵琶一御柏子横笛
うけとりて宝前にならべおく内侍共色々さまざまにそうぞきて
錦をたち着たり縫られせし眼もあやと驚かれ御神楽をは
りて大宮へまゐり幣たまふ御奉幣ありて御経供養あり金泥
の法華一部壽量品壽命經御てづから書かせたまひける御導師

其三
内舎人平朝臣在明

公顕僧正まゐりてこのよし申しければ九重のうち出でて八重
の潮路をわけまゐらせたまふ御志などきく人袖をしぼり
あへず申上ぐるつけとの一くさ糸一包を捧げたまはりけるげんし
ならおふせらる法眼一人なしたまふ神主景弘らにゐあげさ
はせたまふ宮島の座主阿闍梨になしたまふ安藝守在經加階
ひとしなのぼさせたまふ院の殿上ゆるさるゝ隆季大納言が兼光に
仰せける御神楽や御せん八人きぬ一具まとなどたまはせけ
る日くれて帰らせたまふ上達部殿上人の宿所々々美をつくし
て設けたり内侍どもも屋形をしつらひておのおの次でしけ
る月のこゝろなからましかばゆるにおとしゝろまし月なき空を
ぞくちをしくおもひあひたる廿七日空のけしきうらゝかに晴ま
なりて残りの鶯こそはあやまつ木蔭にうつらゆゑも夜

をこえて潮みちて御所のうへまでたゞよひたるまことにこの世
の有さまとも見えず供御などはてましかば御宮めぐりける
べしとて宮へまゐりたまふ今日は布の御浄衣をぞめ
したる國々の守どもまゐらせたるをこの宮のかたへにはこびおく
廊のまへに楽屋をつくりて拝殿をたてたり内侍ども老たる
まことさまし何ゆゑつらなりて御供まゐらするとりつゞきて楽
どもして御戸ひらかれてまゐらするそれぞれそへしかば宮司神人
まで物をたまはる廳官などまでそのうち給ふ内侍ども金銀
のべ錦をたちてはましの花をつけて大口かきて天楽つか
うまつる八人ならびたり天人のおりゐたらんをかくやとぞ
おぼゆるその後はかゝるほどなど舞ふ棹をとるきこえめ
もんもおよばず次（中略）夜にいりましかばこよひ御通夜ある

畢しとて戸ざしをたまふ内侍ども夜も次がら御神
楽あり更る程に七日なる小内侍あるに神つきを経て始は
倒きふして時中ばかりたえ入りけるしかとなし其内侍ども加
へて程経て後いづ御神楽つかうまつる聲きよし作せられ
て神主をしい侍る時ましけのはて其まうけ眼をけやす
此の後とうとがひをなし人をありぬべきにいしをいふひなき
もかくさまし法文など唱えて御神のはじめて此嶋う
あと終れきゆひしことことて中次第く人なるど終ひるぞ次と
終ふをなし入道殿いでて作らるることぞ其ありて後と人き
う次法華經は壽量品をたびたび誦しける額をかきつけたぞ
とおふことなし或は氣高き女房うし後の障子にうつり
て宝殿に向ひたまつる次第にみえるなど申人もあり常に

ありとおぼえぬ御神殿のうちより楽うちばしくにおひし
はまされどろきはるぎあひき誠に高唐の神女はかのやうたな
ありて帝は夢に入りて朝に雲となり夕には雨となりん
と契りたてまつりんあと名らくやとぞおぼゆるあさぐさに
なかしこの八社の鶏と鳴しけるぬとと遠き婦波の音きた
なく瑞籬をけふは汐みつまや白楽天のうしおは来て去は来る
耳にいるとつたへけるをきては風情多くみなりけるまやとか
多くとり侍り果なる折々はありさ海は皆しがしかくて
明ましらば御所へかへらせ給ふ廿八日て過ぎたりの浦々で
らんぞべしとて泉郎ども潜きせさせたまふから花田乃
うりは御なやし唐綾の白き御衣二御大口たてまつ
らせたまい婦御ぞかしはみじうなまめかしうみえはせた

まふ浦づたひてはしまはして御覧ずまことに仙の洞もかくやと覚え
龍宮土とはこれをいふにやとおぼゆる處々おほかりみるめ
などとてまゐる時とばかり御讀經しまゐりて歸らせたまふ辰の
時にまた御宮めぐりありてやがて御船にたてまつる島の
うち毎にいとなごりをしく思ひあひたり　下畧

○百練抄曰治承四年九月廿一日新院御幸嚴島第二箇度也云
云

○古今著聞集曰治承四年九月嚴島に御幸ありける御願文みづ
から御草ありて殿下普賢寺殿清書せさせたまひけり希代のことなりかの
御願文ことにめでたかりければ後日に蔵人宮内少輔親經表紙
かきて奉りけるとなん

○同書曰治承元年徳大寺實定大將を望み成就せざりければつくしま
へ詣でよしんば中に願を立てけるほどに十二月廿七日つひに左
大將になられければつくしまの宿願も頼ありてぞおぼえける同三
年三月晦日嚴島にまゐるとて出られければ大納言實國卿中納言
實家卿などさそひ侍るべきにて自中御門左府もまゐりたまひた
るなり三條左大臣入道その時大納言なり六條の右大臣その時
中將にて侍りけるもさそはれけるとぞいひさかりし此度ぞあることにや
中將はかの島の寶前にて太平樂の曲をまはれけるとぞ語り傳
けるとなり

○源平盛衰記曰徳大寺の實定は大將を宗盛に越られて大納言
をも辭し申されて山家の栖に籠居ありけり　中畧　御身ちかく召つかひ
たまひける侍に佐藤兵衛尉近宗と云者あり事に觸てはかなく
しる者なりければ何事も隔なくうちとけ仰合されけるに近宗

佐藤近宗實定卿に嚴島詣をすゝむる圖
實定公とハ後徳大寺左大臣の御事なり歌に堪能におはしまして三槐尊位の法方また當時この公にならびたまふハおはしざりきしかれども無明の酒を好む名とハえかへるまや名もなき酒とよみたまひしかバ名なしの大將といふ異名をつけられたまひしよし長明の無名抄にみえたりさばかりのすさ公いかでか知しめさゞらん時にとりてふと思ひあやまりけん白玉の微瑕といふべき
真虎

召して宣ひけるは平家は桓武帝の後胤とは名乗れども無下に振舞
くだして僅に下國受領にて拝任せしに忠盛始て家を興し昇殿
をゆるされし子孫なり當家は閑院始祖太政大臣仁義公より已來
君に仕へ奉り代々既に大将を極めたり今宗盛に越られて世に諂
へんする身は為家がさる先人の嘲を招くべしはまだ出家をせずや
と思召れて候るべきと仰けるに近宗申けるは御出家までは候る
べからず次中畧今はいかにもして入道の心を取せ給て一日なり共大将に御
名を係させ給べき御計こそ大切なれそれに取て安藝のいつくしは
へ御參詣ありて穂に出て此事を祈申させ給べし此明神をば平
家深く崇てまつりて其の社に内侍といふ者が居られたりかの内侍
ども毎年一度は上洛して入道に見參に入ると承ればかの御事
て何かりしなど語申せば明神の御計もありまた入道もいち

じる人にて思直はなるまもなりなんと申ければ近宗がはからひ然
るべしとてやがて御精進ありて嚴島へぞまうで給ふ此月二日いつく
しまに着給ふ神前にまゐりて社頭の景氣を拝したまへば皓潔
たる波月は和光の影を静め蒼茫たる水雲は利物の風を帯たり
雲の棚霞の軒いくばくらん年へたらむ玉の簾錦の帳たのみを無で
日をおくりつ遠國にも眺望やはしき名所とて神明地を點し跡をた
れ人を利したまふこそ有がたけれ肩をさし袖をつらぬる内侍も結縁
うらやましく御説をきけば信をいたし歩をはこぶ願望もまなしたのも
しくおぼしかる御參籠は七箇日なり其間内侍ども常にま
ゐりて今様朗詠し琴琵琶弾などして旅の御つれづれを慰め情有
る體に慰め奉る中畧七日過ぬれば都へ帰りたまふ内侍とも一夜
の泊まで御供申て其夜は殊に餘波を惜み奉り明ぬれば暇申ける所

實定宣ひけるはなごりは尋常なりといひながらこれは理にも過たり何の
は苦しう御しるべき都までおくりつけたまへかしまたもとれとふ見参もいた
さんとれあえて行かぬ思ひのんえなむぞと仰られけれバ内侍どもはゝ勞
だに忍びがたき名餘波にかくこまくと宣ひけれバ都までとて送り奉る徳
大寺へ相具し給て両三日勞りて様々とてなし引出物たまつりける
はて母内侍暇給て下りけるが入道の見参に入んとて西八條へぞ参れ
る入道出會ていかにと問たまへバ徳大寺大納言殿今度大將に漏さ
せ給へりとて御祈誓れた免遙々と嚴島へ御参籠七箇日尋常の人
の社参に母似させたまはず思召入たる御有様も尊く見えはせたまへる
上事に觸て御情ふかし内侍ごとに不便にあたり奉ればかさく御
餘波をしくてまたいかの御参も有されんど都までおくり付たまへば樣々
相勞き奉て色々の御引出物たまはりて下り侍るにいかでかくと申入

はるべきとて参てこそと申せバ入道もとよりいちじるき人にて涙をさ
らくと流したまへり良々有りて宣ひけるは近衛大將は家の前途なり
歎たまふも理なり夫に都の内に霊佛霊社其数おほく御望ごとの佛
神をはしおきて西海はるかに漕下り浄海が深く崇たのみ奉る嚴島
まで参詣せられけることいと惜しき明神の御照覧測がたし其上今度
は理運なりし御入道が計にて宗盛卿挙し申たるにこそ計ひ申べし
とてうれしかりけるぞ泣たまへり内侍ども翫引出物なんど給て下はきたり
其後やがて重盛の左におはしける御辭ありて右にうつし實定卿を挙
し申て左大將に成し奉るいつしか同き五月八日御悦申あり今日
佐藤兵衞近宗卿左衛門尉になされける上但馬國木の崎といふ大庄を
賜ける神明忽に御納受尊卿に付ても近宗がもろひ神妙とぞお
ぼしめしける

按ふに實定卿嚴島詣のこと著聞集には心願を立て治承元年左大將に任ぜられ同じ卿三年参詣ありしこととして本段盛衰記及び平家物語の所載とは顛る参詣の先後あり

いつくしまへまゐらん見ん人
それよりしたがへ
○山槐記曰治承三年六月七日前大相國{花山院}令詣安藝伊都岐
島給自一昨日御精進但魚味不憚也丹波守行雅侍從兼經藏人
大夫泰房判官信□民部大夫政清監物康識左衛門尉信直右馬
允高清□令著結衣給云々出彼經供養并内侍{巫也}等給物料也
卅石可忤替仍欲參内之處右少弁光雅令史示遂四□無申旨者
仍延引參内云々廿二日令還向給云々

鹿苑院殿嚴島詣記　源貞世作

先はおほいまうちぎみいつくしまへまうでたまひけり　中略　むかし嚴
島には高倉院御幸なり平のおほいまうち君もたびたびまうで
らるゝ例も侍れど此たびはひきかへてめづらしき御姿ど
もにて花田色に目結ひとかやいふもんを染て袖口おそく襟ひ
ろ紐うちかけとかやも是をれなし次がさね着たまひ赤紐および
に青色に脛巾赤色にみどり紐袴なり御供の人々みなさ
紐だかりなる金がさなども付させらる康應元年三月四日夜に
ろく都をいでさせ給ふ其日の午の時ばかりに攝津の國兵
庫の津につきたまひ御座船に參るべき人々かねてさ
だめらる

修理大夫　右京大夫
日野弁　畠山右近大夫將監
同七郎　關口 今川修理亮
吉下　古山十郎

これらはおのおのの舟にてまゐり侍り
畠山右衛門佐　山名播磨守

細川淡路守　土岐伊豫守
探題伊豫入道　今川越後入道
同右衛門佐　同中務少輔
伊勢衛門入道　曾我美濃入道
朝倉因幡守　若王寺別當
古山珠阿　松壽丸
士佛

九日備後の国尾道といふ所のましにくだらせ給ふ糸崎いく
ちれ島などいふ浦々にもあそびて見申こし所々いましころ
筑紫へくだり侍りしと絶ともあり侍りしなりが案こし南に伊豫
の三島はるかにみえたり今夜は安藝の国高崎といふ海べた
に御船をうけらる十日またこぎいださせたまふ三津風早やま

地内の海神代日呂久礼畑見二の浦刈の迫門といふ浦々過
させたまへりけれど乃迫門といふは瀧の如く潮もはやく狭きと
こそなり船ともおしなされども手もたゆくこぐめり
ふな玉にぬさも取あへも落瀧つ早き汐瀬をすぎまゐる哉
豊崎などおし過ぐる程にまた夜に入て子の時ばかりまいつく
しまに着せ給ふ御社のうしろに黒木の御旅所をつくりて今
夜は舟にまかれと侍りたる人も多かるべし十二日御社をおし
がませ給て御前の浜なる鳥居わたりより案かでにて御船に
うつりまいり御社の廊々拝殿などに巫内侍やうの神司
女ども舟ならびたりかも来りむかへ居たるにいとよく似たり緒
方とかやいふはおもにたる川とて安藝と周防のさかひなる川乃
さきの海づらにて周防の国ちかうちかう室積などいふ所々に来り

見ゆ屋代の島伊豫の國并前の山など南にあたりてかすみ
て波のうへもうちかすみたり夜船はこゝろもとなる所し
とて神代よりの海上に御座とみりなり　下畧

○源貞世今川了俊道行ぶりに曰長月廿日につくしへまうで侍るこれ
島は峯三尺ばかりぞびえ侍りて深山木の年ふりたるうちにまじ
索て老たる松の岩のうへに生かさなりて磯際まで参りたりかの
御社の屋うへをこし戌亥にむかひたり廊の下まで潮うち入たり鳥
居は海の中にたてり島の四方に入江ども侍りまたありて見処ある人
侍るなり百浦侍るとぞ申う次あそれん宗まで此あそりてこそ見え祭
て知とふどち見侍りましつばとまづ都の友も故郷のおやもこひしく侍
るかな弥山瀧本などいふ所こそ浦なれど毎日くまぬべしとて御やがて
しげまゐらぬなれしかどれ見ぞなりまかりて御出の外ま

こそいでゝ佛舎利（東大寺葉室）海に入たてまつりぬ此度の祈なるべし夕日にむ
かひてこそさゝるほどひくしほに向て船おそく侍るは磯際のぬるみに
かけて侍りしなど船子どもの物がたりなどてかくれぬふぞとたづね侍り
しかばかやうに潮のみちひの早き時は磯際の潮のはやさまに流侍るほ
どに船のこそよく侍るなりぬるみと云よどみの事を申次といふ

いそ際のぬるみにかけて出し舟のはやくしほちむかふほどなき

此浦は四方に山くちかさなりていづくの潮のみちひも通ぜんとおぼゆる
海中にこの島も侍るなりけり誠に海の都のあるじの御座とおぼえ
てこの世の中とも見え侍らずくらすりてそはましき事でおぼえし　下畧

○豊鑑曰秀吉公中國の經て名護屋におもむきたまふ安藝の廣島にて
毛利住になれば一日二日留りたまふ近くれぞいつくしまへ詣たまふ御社
はきたにむかひ海を望み廻廊舞殿など潮干ぐさの白砂に作りめぐらし

豊臣太閤御社參の圖
逸史曰。文禄元年四月。太閤抵厳島祠。駐師禱之。令左右取銭一緡。祝曰。投而多面以得志矣。揮手一擲。毎銭皆面。
紅師衆相傳観呼
隨納銭于神
粘合二銭作
太閤大喜。
庫蓋預
両字云
逸史氏曰。
豊公似襲狄青故智。然公之不學。豈知史冊上有是事哉。蓋
英雄一時機鋒。偶然有暗合焉爾。
亦可以為一奇矣。とあり逸史ハ
中井積善の著したる書なり
この事武徳編年集成にもいづ

けれバ潮のみち来る折からハ板敷にひたるほどにはしるみさゝ波よりまばたゞ波の中をありく如くなる其の粧ひはあはれなるになりぬべし

○正應五年八月十日奉納和哥

海邊霞　権中納言為世

なにはがた波はそれともわかぬ淡雲に梢をかけてたつ霞かな

梅風　権中納言為方

世とみし花もかをらぬ色ひに春やむかしの梅の下風

春暁月　権中納言俊定

いりやらで露のおきちる月かげのかすみにくもる春の明ぼの

雲間花　従二位隆藤

月はいるみねの雲間にあらはれて色見えかゝる山桜かな

岸山吹　法眼玄兼

暮の浪ちるさへはしにおりかへて浪と浪岸にかゝるやまぶき

関子規　左近衛中将為藤

しばしとてやすらふもよそに子規なきつる須磨の関守

浦五月雨　入道中納言公雄

真袖に浪隙もなかれぬま衣うらかきくもるはれまなの空

芦間蛍　従三位兼行

野沢なるあしの葉末をゆく風に見えみえかくれ蛍かな

初秋風　従三位重経

たつるともおもではつげぬ秋風にもよほされぬる夏衣

露知秋　右近衛中将實躬

いまより家の露をかさねて草葉にもおとらぬ袂のなみだなるらん

近鹿　前権僧正良覚

一 身にさむき軒端の山のはげしさにつれなき恋しらの声

月前舟　　修理大夫實時

風さむし浪や浪路をゆくかに月をそへてはやく舟人よはに漕ぐなり

杜紅葉　　前関白家一條

うつりゆく秋の森の梢にぞしぐるるほどに色は見えける

夜時雨　　津守国助

しぐれゆくただひとむらの雲やなほ月をもはらふよはの山風

浦千鳥　　大蔵卿

むら雲やたよふ来れなき友よび月はむかふに浦づたひなり

雪中松　　右馬頭定成

しばし見て嵐もはらへ世のあらぬ浜辺の松のへだつる

山路嵐　　少納言季長

梢が香にやあだの末に吹きはらふあらしや花のしるべなるらん

旅泊夢　　沙弥明覚

ちからぬ浪のうきねのとまり舟夢路をゆくに都をぞ見る

寄衣恋　　左近衛少将隆教

うしやただなどつらきのなきにかかるへだての中の衣手

寄玉恋　　侍従為守

軒端よりこぼるる露のしらたまもしほにあまる色やみえなん

寄書恋　　玄輝門院少将

ためしにはたよりもかなし荻の葉に風のつてなるつゆの玉づさ

寄舟恋　　新院新大納言

松しまや渚によするあまの小舟みるめもかせて漕ぐべしとや

寄貝恋　　右近衛中将親平

うちよせてたゞよふ波のうつせ貝ひろひあけてなほやうらみむ

浦鶴　散位親範

ふけこなる浦ミの月はあけぼのゝ松風さむくたづも啼なり

磯鷗　寂念法師

なるは江やいその松かぜこゑくれて浪さわぐかも鴎なくなり

夕述懐　右近衛中将為實

経ぬるらむなし望月日もたそかれて夕ごとにもしのばるらん

暁懐旧　右近将監政秋

はてもうきむかしはいつもおもほえねど寐覚ぞおもかげ限なる

壽量品　沙門昇覚

世来てなほたづも空よりはいつも坂はよりして来る命なりけり

普門品　藤原仲光女

ねがふべきかぎり世あらじ淵き江にもかゝりて世たてし誓かな

玄佛本願力　漸定

花の名をそれとしるても夕がほの光は露のなさぞましける

社頭花　祢宜鴨祐治

しら妙のいろかははねてさく花に木綿かけまさるしめのうちかな

社頭月　明玄

まもるべきけとたのめばいつしま神も月まれてらしみるらむ

社頭祝　従三位經守

せめて世をまもるちかひやいつくしま浪のおちにも世風をさまらん

これ散位藤原親範の宿願によりて奉納せしところにて、なもなつくしまれたいみやうじんしんがうのそまうかなへさせおはしませといふ三十三字を冠として
よめる歌どもなん、筆者は藤原經名、小序は少納言季長つかれり、其文は煩はしさに略せり

山家集

安藝の國に一宮へまゐりけるにたかとみの浦といふ處にて風にふきとめられて程へければ苫ふきたるいほりより月のもりけるを見て

浪の音を心にかけてあかすかな苫もる月のかげをともにて　西行

まうで侍つきて月いとあかくてあはれにおぼえければ

もろともに旅なる空に月も出て澄めばやかげのあはれなるらん　同

風雅集

九月十三日の夜いつくしまへまゐりけるに便船の鞆といふ處にて海辺の月といふ事を

あはれ夜の月が独ぞなごりあるおもひぞ磯に涙まさりして　藤原公重

九州道の記

それより巌島ちかくなりて社頭を見るに鳥居は海の中にて二町ばかりとおぼしくて立たる廻廊も柱はみな潮につかりてありければ
より見て

遠島の下津岩根の宮ちらしは波のうへより立つると見ゆる　玄旨法印

これらをかきて安藝國宮司棚守左近將監方へつかはしけるとかや云々

りて月になり侍りしは立出てふく隈まで見ゆるは汐干しおほせる濱のま
へにありて汀二三町ばかりもこち方になりぬるをかしがたの海の
いづく哉と宗祇宗碩なりてことをかなるの郷　下畧

みな月三日いつくし浦まで
さ浪しお世光をそへて嶋の名に宮居ふとしき夏の夜の月　似雲法師
ともしびたつの宮居もうかぶと見えてつゞける浪のとも灯　同

同夜御殿の百八燈を献じたてまつりて
世をてらすひかりもたかき宮しまの神に心をかゝげもつ人　中納言持豊

たゝへこと葉　僧海量

かけまくも世あ風にかしこく言巻もゆゝしき伊都伎しまひ
来れしづまりいます安藝の海いつきし浦の大宮によるひな
世し波のうちさし浪浜辺ちかくやまのをみひろら
ましたつ岩根に宮柱ふとしきたて高天原に千木たかく瑞の
大ミいらか神さびたてりれなん御前のうてなひろく見ゆる殿
長くつゞなり竪に横にわたる橋うちはしけるさし右は左に
石垣玉垣ひきまどゝりかなたこなたなる山ひくき御門つたをど
乃をはましく残る隈なく大床の下までうしほれ満来るは
ま世にたぐひなくえでつべし月のかげ燈のひかり波にうつろ
ひ空にかゞよひんのちり世拂ひつべしいつきの世かぎりなる人の
えではじみえんみちのくれ松島たにはのをれ後なる天の橋
立これいつくしまれをを世にひでたる名くとし侍とゝ谿なり
と人ごとに言継かたりつくえり然いあなれとまぐ皇国のひろき
かぎもかぎらぬ名くとし侍處々山のたかき河の大きき野のひ
ろき原のふかき島のそらなくへる谷の八十隈えぐらへる巖れ

けをしくさびへたる石の奇しくあやしきあるは神の杜仏乃
庭の静かくかなくまさはら座びろに小蛇は一面ゝ竺ゝしたくさ
まひ一ゝとなる波あるはおもしろくおもしろくなる所あるは雄々し
くゆたかなる所あるはうるはしく長閑なる所あるは清らかにこま
やかなるそれぞれにむかしおもしろき波そぞろへ世の時のう
つりかはるおりにふれ時にしたがひ来つ変きする異なるにま
た人ごとによしとふこともて語くの同じからざればれたまや
人からそれぞれ来ぬ定むべきしらんはまどまさおのもくいとも
いとも見ておもひつることば言葉をもへらざればあらざれば今こ
こ語らふいなどもそれ六十あまりそれぞれの道を廻りたるにうちみる
に眼をよろこばし来んをなぐさむしむるにまことと世にた
ぐひあらじとれもつるは布自の高根あふこそれは紀の国の熊
野なる那智の瀧なるべしなおうまくれたらんには阿波のな
るとの瀧なるはきおひ吉野の花ぞ長閑なるよおもひ
たへなりといへども多く乃国中に其のたぐひなしといふべか
らず是はとまれかくも海と今このいつきしま世にひでたる
ことをあげつらはず松島は立厳島の三つは広くしく由
たる奇しく怪しきたぐひにあらず清らかに海やかにあれ
しくそれどもなるかことにして其地をめぐる兎尾から尾徘徊ふ
旅人けもゝそかしこ漕ぎめぐり眼をよろこばし来る所なく
はましむるに世に秀たりと来だちやさんことうべなりけ
て三つの内たがひにそれぞれ異なるいつきれとり
まはりはあるべからされど松しまは立は浦辺島田にそ
それたぐつることは海な蛇まある波嵯しまれみちもと大床

乃下までうしほの満来るよそひまことに世にたぐひなき
名ぐはし紀ゑ語なりと筆でもやまべきにこそうたよみ
していつく
宮柱ふとしくたてるみづがきは汐のみちくる島そこれ島
まことに神の宮ゐもいなかもいつきしまべのかくれ瑞籬
みづから紀にみちくる汐にともし火ゆらけどうつろきし紀乃でに
朝にゆく見まど毎あらじ神風のいつきしまはひまよりる白浪
安芸のうみいつきしま根の動なくはるかえゆらなかく万代は

○

安芸のいつくしまにて

みつしほいたく大海のいづくこう那　宗祇
これも海のみづの細江や朝がすみ　紹巴
みつしほに月よりうつる宮居かな　宗長
亀井うつる乃底まろかを見るわきつ糸　玄仍
満しほにうかぶやこの果これ花の底ま　遊行
なごや月かげうつるひかりいつくしは　松梅院
これ余大内義隆の厳島千句とりにし連歌あり陰徳太平記に載たりこゝに略す
宮じまや燈籠の火にあけをさし　其角
燈籠やいつくしは底第なみの花　美濃　支考
み社島や廻廊に夜のたちやにき　伊勢　涼菟
松の雪うみも彩色やいつくしま　洛　重頼
としにたついつくしま根のよつ乃麻　難波　沾々
梅が香や眠り流しろし宿直祢宜　野坡
まが恵方むかしまつりはいつくしま　洛　闌更

社頭（しゃとうの）明燈（めいとう）

平安孝敬

あはれたがいづらのよるをうけ継ぎて光久しきこやのともし火

岡田清

硝子の玉屋まち葉れいつくし海　尾張 露川

水是潮兮山是島。山光相映落波瀾。不離當處神仙境。百八廻廊一社壇。　釈自休

後青山兮前水濵。徳輝嚴島大明神。今宵有心萬燈闇。百八廻廊月一輪。　大徳寺 釈江月

寛永丙子春欲去萩陽遊伊都岐島口譲

二首。題榜壁間。

恭惟市杵島姫命。神聖靈蹤益壯哉。廟貌巋然浮海水。怪看蜃氣吐樓臺。　石川文山

同

江山頗係念。行樂賞春晴。俯看魚龍躍。仰聞猿鶴鳴。月昇燈影淡。風静磬声清。要永別雲水留

詩記姓名。

嚴島海雲

市杵姫祠名久聞。大師懇禱意慇勤。誰分蓬島移西海。神徳添輝五色雲。　向陽林子

社頭明燈

八景乃一〇八景ハれそゆる社頭明燈。大元櫻花。瀧宮水螢。鏡池秋月。御笠濵暮雪。谷原蘗鹿。有浦客船。弥山神鴉等なり。

汐みちて波にうつる毋粒ぞ見ると社宮ぞ海のミやのともし火　正二位通躬

波間より見えて粒あると毋し火は宮居もさらしいつくしま山　梅月堂 宣阿

明燈やことにとしたつはしめの夜　野坡

御燈たてまつるばかりはつき屋そ　風律

嚴島雲晴飛繡甍。宮廊壯觀壓西瀛。神燈波面幾千點。添着和光夜々明。　二品親王堯延

好山朶々鏡中看。百尺樓臺海氣寒。夜有神　黄檗 悦峯

燈光映波却疑星斗落欄干

鴉定鶴棲飲夕陽。紅燈百八點長廊。夜潮推

迸万波色。天女分来無盡光。

僧獨麟

嚴島圖會巻之　終